



太陽王と蜜月の予言

里崎 雅

MIYABI SATOZAKI



ノーチエ文庫



登場人物 紹介

ブルーノ

辺境の街を治める領主。
女好きでずるがしこい。

マーガレット

ブルーノの娘。
銀髪美しい少女。
太陽王の花嫁となる
月の姫候補。

クレイグ

アレンの頼れる側近であり、いとこ従兄。
穏やかで飄々としたクセモノ。

ザラ

ブルーノの家の使用人で、
ライラの育ての親。
優しくしっかりした女性。

アレン

太陽王と呼ばれる
サマルド国の若き王。二十五歳。
予言に従い月の姫を
迎えに来るが……

ライラ

赤子の頃ブルーノに拾われ、
それ以来、屋敷の使用人として働く。
心優しく芯が強い少女。
十八歳。

目次

太陽王と蜜月の予言

7

書き下ろし番外編

ザラとライラの絆

345

太陽王と蜜月の予言

プロローグ

——この方は、なぜ私にこんなことをするの？

突然熱い唇を押し付けられ、崩れ落ちそうな身体に必死に力を入れる。冷えた身体を温めるかのように、大きな身体がライラを包み込んでいた。

まるで宝物にでも触れるみたいに、彼の柔らかい唇がそこら中に優しくキスしてくる。

初めて出会った人にこんなことをされているというのに、不快な気持ちになるどころか、ふわふわと宙にでも浮きそうな心地よさを感じていた。

男の指がゆつくりと絶妙な強さで全身をなぞり、ライラはふるりと背筋を震わせる。

「ふ、あ……」

優しい愛撫に頭がぼーっとして、いつしか切なげな息を吐いていた。

崩れ落ちそうになった身体を、男が力強く支えてくれる。

熱に浮かされた瞳で見上げると、男は目を細めて再び唇を合わせてきた。

僅かに開いた唇の隙間から熱い塊が差し込まれ、口内をぬるりと舐め上げる。熱く蠢くそれが男の舌であると気づく間もなく、ライラはされるがままに自らの舌を吸い上げられていた。

舌に軽く歯を立てられ、背中がぞくりと粟立つ。

粘膜同士を触れ合わせる初めての感触に、うっとり酔いしれる。

ふと、相手の唇が離れたことに気づいて、うっすら目を開けた。

月明かりの中、目の前の男の顔を見つめて首を傾げる——そんな訳がないと思いがら、ライラはそっと呟いた。

「……へい、か……？」

輝くばかりの金色の髪に、エメラルドのような緑の瞳。一度だけ見た肖像画の記憶が正しければ、彼はこのサマルド国の王に間違いなかった。

そのような方が、なぜこんな夜更けに川辺にいるのだろう。

これは夢だろうか。だとしたら、熱く火照ったこの身体はなんだろう。

「あ、あ……っ、陛下、なにを」

首筋に舌を這わされ、ライラは今まで上げたことのない甘い声を上げた。

恥ずかしくてたまらないが、やはり嫌だという感情は全く湧いてこない。それどころか、まるで求められているようで嬉しくなってしまうのだ。

彼はひどく楽しそうに口元を歪め、ライラの身体を舐め上げていく。不思議で気持ちがいい感触に、脚の間がむずむずしてくる。たまらず声を上げると、その人はまた嬉しそうに笑った。

「見つけたぞ、やっと」

男の言葉も耳に届かず、ライラは満月の下でただただ甘い声を上げ続けた。

1 月の姫と黒髪の子

サマルド国の国境に近い辺境に、『奇跡の街』と噂される街があった。

この十数年、周りの街や村がどんなに日照りや水害に悩まされようが、その街は何かを守られているかのようにずっと豊作が続いている。元は小さな村であったそこは、いつの間にか大きな街へと変貌を遂げていた。

その街が、お祭りでもないのに時期はずれの賑わいを見せている。街は華やかに飾り付けられ、誰もがどこか浮足だっていた。

「いよいよ、陛下がマーガレット様に会いに来られるつてよ！」

「こんな辺境の街に月の姫が現れるなんて、めでたい話だねえ」

街の人々は顔を合わせれば『月の姫』の話題でもちきりになる。

月の姫とは、国王の花嫁となりサマルド国に繁栄をもたらすと言われている銀髪の子のことだ。

マーガレットは、この街の領主ブルーノの娘で、銀色の髪をしている。この街が『奇

跡の街』と呼ばれるようになったのはマーガレットが生まれてからだと言われており、街の人々はマーガレットを『月の姫』だと信じていた。

そんな『奇跡の街』の噂が王宮まで届き、ついに国王本人がこの街にやって来ることになったのだ。

国王一行を迎えるとあつて、領主ブルーノの屋敷では慌ただしく使用人たちが働いていた。

「ライラ、マーガレット様のお部屋の掃除に行つとくれ！ この忙しい時に『私の部屋を一番キレイになさい』ときたもんだ。昨日徹底的に掃除させられたばかりだつてのに」

メイド頭がうんざりした様子で、台所のすみっこでじゃがいもの皮を剥いていたライラに声をかけてくる。

「ほら早く！ マーガレット様が、あんたをご指名なんだよ」

「は、はい！」

ライラは慌てて立ち上がった。

今年で十八になるライラは、赤ん坊の時に川辺に捨てられていた孤児だ。偶然通りかかったブルーノに拾われ、以来物心がつく前よりこの屋敷で下働きをしている。

こういう理由かはわからないが、マーガレットはそんなライラを何かにつけて呼びつ

け、自分がいかに優れた『月の姫』かを思い知らせるのだ。

ライラは粗相のないように入念に手を洗い、掃除道具を持って階段を駆け上がった。

「マーガレット様、ライラです。お部屋のお掃除に参りました」

コンコンと控えめにノックをすると、部屋の中からはひどく不愛想な声が響いてくる。

「遅いわよ！」

身をすくませながら扉を開け、ライラは深々と頭を下げる。

濃いイエローのドレスを身に纏ったマーガレットは、不機嫌そうな表情で長椅子に身体を預けていた。その背に流れる豊かな髪は、美しく艶やかな銀色だ。この銀色の髪こそ、彼女が『月の姫』候補である証だった。

「陛下は、私に会うためにこの屋敷にいらつしやるのよ。だったら私の部屋を一番キレイにするのは当たり前じゃない。本当に皆、気が利かないわね」

ブラウンの瞳を細めてそう言い放つと、マーガレットは鈍く光る銀色の髪を揺らしながら立ち上がった。

「ほら、さつさと掃除しなさい」

「はい、今すぐに」

慌ててライラは手に持った箒で、埃ひとつ落ちてはいない床を丁寧に掃き始めた。

頭を低く垂れたライラを見て、マーガレットが可笑しそうに言った。

「汚らしい髪ね……。艶がなくてボサボサで」

まっ黒で艶のないライラの髪は、櫛でとかとすぐにはち切れて広がってしまった。忙しい日々では手入れをする暇も余裕もなく、いつも髪を無造作に麻紐で一つに縛っていた。

「その汚い髪を落とさないように、注意しなさいよ」

「は、はい」

美しいマーガレットに鼻で笑われ、ライラは恥ずかしさに俯きながら黙々と掃除を続ける。

多少目元に気の強そうな性格が表れているが、健康的な肌に切れ長の目をしたマーガレットはとても美しい少女である。領主の娘ということもあり縁談も後をたたなかつたが、それを全て断っているのはひとえに『月の姫』として王妃になると本人が決意しているからだろう。

美しいマーガレットに対し、ライラは身寄りのない孤児だ。

それに、ブルーノに拾われなければ、死んでいたかもしれない。それを思うと、こうして雇ってもらえているだけ幸せだ。

黙々と掃除を続けていたライラは、ふと寝室の奥に小さな絵画が飾られているのに気づいた。前にマーガレットの部屋に掃除に来た時には、絵など置かれていなかった気がする。

何気なくその絵画を見た瞬間、ライラの胸がどきんと大きく跳ねた。思わず掃除の手を止め、その絵に見入ってしまう。

「ふふ。あんた、あれがなんの絵か知ってる？」

掃除の手を止めたライラを叱りつけもせず、マーガレットがなぜか微笑んで話しかけてきた。

無言で首を横に軽く振ると、マーガレットの笑みはさらに深くなる。

「サマルド国の若き王、アレン様の肖像画よ！」

そこでライラは、マーガレットが注意しなかった理由を理解した。そもそも彼女はこれを見せるために、ライラを部屋の掃除に呼んだに違いない。

聞いた話によると、マーガレット以外にも月の姫候補の娘はたくさんいるらしい。だが、こうして国王の肖像画が王家より送られてきたのなら、マーガレットが『月の姫』と認められたということの意味しているのだろう。

「おめでとうございます、マーガレット様」

深々と頭を下げつつも、なぜだかライラはあの肖像画が気になって仕方なかった。自然と視線が引きつけられそうになるのを、必死に耐える。

そんなライラの様子に気づき、マーガレットは楽しそうに肖像画へと近づいた。

「さすが太陽王と言われるだけあって、アレン様は本当に素敵な方なのよ。見て、この美しい金髪……並ぶときつと、私の髪とつり合いが取れるわね」

国王に対して「自分とつり合いが取れる」などという発言はどうかと思ったが、この屋敷ではマーガレットが絶対だ。ライラは賢明にも口を噤み、再び掃除の手を動かし始めた。

しかしどうしようもなく肖像画に惹きつけられてしまう。無意識にチラチラと視線を動かしていたライラの前に、マーガレットが立った。

「そんなに見たいの？ 特別に、もっと近くで見せてあげてもいいわよ」

「え……」

思いがけない言葉に、ライラは思わず掃除の手を止める。

マーガレットはそんなライラの反応に笑みを浮かべ、寝室から肖像画を持ってきてライラの目の前に掲げた。

「ほら、見てごらんなさい」

ライラは吸い寄せられるようにその肖像画を見つめた。

（この方が、国王のアレン様……）

意志の強そうな目でこちらをじっと見据えている王は、黄金の髪に王冠を載せ、白い正装に身を包んでいる。森林を思わせる緑の瞳に、すつと通った鼻筋をした高貴な顔立ち。ライラは自然と、ほおつと感嘆ともとれるため息をついていた。

「素晴らしいお姿でしょう。アレン様は、先代の王が亡くなられた時にはまだ十五歳でしかなかったのに、このサマルド国を立派に治められているの。今や先代を超える名君と言われているんだから」

マーガレットは興奮した面持ちで言うのと、絵画を胸に抱えた。そして、絵画に目を奪われていたライラに向かって勝ち誇ったような笑みを浮かべる。

「この方が、私の未来の夫なのよ」

マーガレットが「未来の夫」と口にした瞬間、ライラの胸がずくりと締め付けられるように痛んだ。表情を曇らせたライラを見て、マーガレットがくすくすと笑う。

「さあ、いつまでぼーっと突っ立ってるの。自分の仕事をしなさい。ぐずね」

「……申し訳ありません」

ライラは小さな声で謝ると、忙しなく箒を動かした。なんとか気持ち切り替えて、

丁寧なマーガレットの部屋の掃除を終える。

「失礼いたします」

気怠けだるそうに長椅子に腰掛けているマーガレットに声をかけ、ライラは静かに部屋を後にした。

（陛下が、マーガレット様を迎えに来られる……）

——白銀の輝きを髪に閉じ込め生まれてきた娘は月の姫と呼ばれ、太陽王の花嫁となる。

伝説とも予言とも言えるその話は、サマルド国の者なら誰でも知っている。銀の髪を持ちこの街に奇跡を起こしていると言われているマーガレットが、月の姫として国王に迎えられるのは当然だ。

それに、ライラには関係のない世界のこと。

皮を剥むかなければならないじゃがいもは山ほど残っているし、下働きのライラがやらなければならぬことはたくさんある。

日々を生きるだけで精一杯のライラには、所詮別世界のことだ。

頭の片隅にちらつく国王の姿に気づかないフリをしながら、ライラは小走りで台所へと戻った。

国王の一行がやって来る前夜、屋敷の使用人たちは全員食堂に集まるようにと指示された。ライラも、育ての親であるザラと一緒に食堂へ向かう。

ライラより二十歳年上のザラは、捨てられていた自分に、『ライラ』と名を付けて娘のように育ててくれた女性だ。

しばらくすると、口ひげをたくわえたブルーノが威厳たつぷりに食堂へ姿を現した。

「明日、いよいよ陛下がこの屋敷にお見えになる。皆、くれぐれも粗相そそうのないように。明日は全員、新しく配った服を身に着けるんだぞ」

国王がこんな辺境の領地を訪れることなど滅多にない。本来なら一生目にするようなどない国王を見られるかもしれないとあって、使用人たちの間に言葉にならない興奮が広がっていく。

そんな中、ライラは沈んだ顔で冷たい石の床に目を落とした。特別なお客様が来る時、ライラは必ず地下室に閉じ込められるからだ。

『お前のような者をお客様の前に出して粗相されては大変だ』

ブルーノはいつもそう言って、有無を言わさずライラに地下室行きを命じるのだ。

確かにライラはそれほど仕事ができるわけでもないし、バサバサでみすばらしい髪を

している。こんなみつともない使用人がいては、陛下の印象を悪くしてしまうのかもしれない。

(でも……遠くからでもいいから、一目陛下を見てみたい)

ライラが祈るように胸の前で手を握っていると、それに気づいたザラが優しく背中をさすってくれる。

「おい、ライラ」

しかし、低いダミ声に呼ばれ、ライラはびくりと身体を震わせた。声をかけてきたのは、この屋敷の主であるブルーノだ。

「わかつているな？」

確認するように、ブルーノの指が下に向けられる。

「……はい」

か細い声でそう答えると、ブルーノは肥えた身体を揺らしながら二、三度頷いた。

わかつてはいたが、悲しくなつてライラの気持ちしが沈んでいく。

「いいか。拾ってやった恩を忘れて言いつけを守らない時には、この屋敷から追い出しとやるからな」

そう言うとブルーノは食堂から去っていった。その後ろ姿を見送りつつ、ザラがため

息をつく。

「可哀想に。またあんな暗い地下室に行かなきゃならないなんて……」

ライラはザラに心配をかけまいと、無理に笑顔を作った。

「大丈夫。ほんの数日のことだもの」

ザラは悲しそうに眉を寄せて、ライラの髪の毛を優しく撫でてくれる。黒くてパサパサに傷んだ髪を、こんな風に優しく撫でてくれるのはザラだけだった。

ザラに見送られ、ライラは静かに部屋を出ると地下へ続く階段に向かった。コツコツと靴音を立てながらじめりとした地下に向かうのは、否が応でも気が滅入る。

見張りもない。鍵もかけられていない。逃げようと思えばどこにでも逃げられる。だが、この屋敷しか知らないライラにとって外の世界は未知の世界だ。逃げ出すことなど想像もできない。

——でも……このまま、ここで一生を終えるのかしら。

そんな考えに囚われていたからだろうか。背後からブルーノが近づいてきているのに、ライラは全く気づかなかった。

「何をしている。さっさと中に入らないか」

突然すぐ後ろから低いダミ声が聞こえてきて、ライラは飛び上がらなばかりに驚いた。

「す、すみません……」

「お前が隙を見せるのは珍しいな」

にやりと嫌らしい笑みを浮かべたブルーノが、ライラにさらに近づいてくる。さっと背筋に寒気が走り、ライラは数歩後ずさった。

「川の傍に捨てられていた赤ん坊のお前を、拾ってこの屋敷に連れてきてやったのは誰だ？」

「ブ、ブルーノ様です」

ライラは震える声でそう答えた。

ブルーノは舌なめずりをしながら、怯えるライラに近づいてくる。

「ふん。痩せっぽちでかかしのような子供だったのに、年頃になって多少肉付きがよくなってきたじゃないか」

じろじろと胸元を見つめられ、ライラは咄嗟に両腕で胸を隠した。細い身体とは裏腹に、ライラの胸は服の上からでもはっきりわかるほど大きくなっていた。

ブルーノにそれを見られていると思うと、背筋が凍り付く。

「お前を拾ってやったのは俺だ。俺がいなければ、お前はあのまま野垂れ死んでいたかもしれないのだぞ……命の恩人である俺がお前をどうしようとも、なんの問題もないな」

間近で酒臭い息を吹きかけられて、ライラは必死にブルーノから顔を背けた。

彼の女癖の悪さは街中に知れ渡っていて、酒場で女を弄ぶ様子がよく噂されている。さらにブルーノはライラが成長するに従い、たびたびこうして気持ちの悪い言葉をかけてくるようになっていた。

青ざめてぶるぶると首を振るライラの胸元へ、遠慮のないブルーノの指が伸びてくる。背中に冷たい地下室の扉があたり、これ以上は逃げ場がない。ブルーノの指に触られそうになったその瞬間、ライラの身体の中に不思議な感覚が湧き起こった。

「うわあっ！」

地下室に光がはじけたと同時に、バチンと大きな音が響いた。

ブルーノが大きくのけぞりライラから距離を取っている。驚いて目を見張っていると、指をさすっているブルーノに睨み付けられた。

「チツ……いつもいつもこうだ。本当に気味の悪い娘だな」

忌々しそくに吐き捨てたブルーノが恐ろしくて、ライラは壁際で小さくなって震えていた。

「いいか！ 俺がいいと言うまで、絶対にそこから出てくるなよ！ お前のような気味の悪い娘を陛下のお目にかけるわけにはいかないからな！」

ブルーノはくると踵を返すと、そのままカツカツと靴音を響かせながら足早に階段を上っていった。

一人残されたライラの周りに、一気に静寂が漂う。ブルーノの気配が完全に消えたところで、ようやくライラはほっと安堵の息を吐いた。

「よくわからないけど……また助かったみたい」

屋敷の使用人は女性だけではなく、むしろ男性の方が多い。そんな男性たちが、使用人の中で一番若いライラに目をつけるのは自然なことだ。

数年前からライラはブルーノだけでなく他の男たちからも何度も襲われそうになっていた。けれどその度に、不思議な力が男たちをはねのけてくれたのだ。

一方、それが原因でライラは「気味の悪い子ども」だと噂されるようになり、ザラ以外の使用人からは距離を置かれるようになってしまった。だが、それにより男たちが近づいてこなくなるのならライラにとっては好都合だ。

不思議な力が働く理由はわからないけれど、ありがたいとさえ思っていた。

「ライラの心が優しくして一生懸命だから、月の神様がライラを守ってくださってるのかもしれないわね」

いつだったか、皆に距離を置かれる原因を恐る恐るザラに打ち明けると、彼女は気味

悪がることもなくそう言ってくれた。唯一の味方であるザラにそう言われ、どれほどほっとしたことだろう。

なぜザラが月の神と言ったのかはわからないが、ライラはそれ以来必ず月に向かって祈りを捧げるようになっていた。

「ありがとうございます、月の神様」

暗く閉ざされた地下室から、夜空に浮かぶ月が見えるはずはない。けれど目を瞑って祈りを捧げると、まるですぐ傍で月が光り輝いているような気がするのだ。

瞼の裏で銀色の光を感じながら、ライラは深く息を吐いた。

ゆっくり瞼を開いても、そこに広がるのは暗く湿った地下室だ。

ライラはどこか寂しさを覚えつつ、部屋の隅に置かれた堅いベッドに近づきそっと身体を横たえた。

そうして思い出されるのは、明日やって来る国王のこと。

けれども国王は、ライラが暗い地下室で過ごしている間に、マーガレットを連れてこの地を去ってしまう。そう思うと、なぜか胸が痛くて仕方なかった。

ただ一度肖像画を見ただけの相手なのに、どうしてこうも気になってしまうのか、ライラ自身にもわからない。

この胸のざわめきは、きつと一時のものだ。すぐに忘れるに違いない。ライラは無理やり自分を納得させると、そつと目を閉じた。

* * * * *

戦でもなければ外交でもないのに、こんなに長く馬車に揺られる必要などあるのだろうか。

サマルド国の若き王アレンは、革張りの馬車の座席に背を預け不機嫌そうに腕を組んだ。

馬車の中にいるのは側近のクレイグだけだ。心を許し全てを話せる相手を前に、アレンは内心の苛立ちを隠そうともしない。

「月の姫なんてくだらない、そんな感じのお顔ですね」

向かい側の座席に座るクレイグが、そんなアレンに苦笑いしながら言った。

「……くだらないとは言わない。必要ないと思っただけだ」

父である先代の王が早くに亡くなったため、アレンが即位したのは十五歳の時。あれから、もうすぐ十年が経とうとしている。

確かに二十四歳ともなれば、王妃を迎え跡取りがいてもおかしくない年齢ではある。

だが、わざわざ『月の姫』を探しだし王妃とする意味がアレンにはわからなかった。

「皆、早くアレン様に跡取りが欲しいと心配しているのですよ」

「だったら、どの娘だつて構わないだろう」

「下手に貴族の娘を王妃に迎えるよりも、伝説の月の姫を娶った方が箔がつくでしょう？ 何より、王家お抱えの予言者ブラウン様があんな予言をされたらあつてはね」

アレンはふんと鼻を鳴らして、馬車の窓から外を眺める。

——白銀の輝きを髪に閉じ込め生まれ出た娘は、月の姫と呼ばれて太陽王の花嫁となる。そして、サマルド国にさらなる繁栄をもたらすだろう——

この国の民なら誰もが知っている伝承だが、実はこれはただのおとぎ話ではない。月の姫とは伝説でも夢物語でもなく、王家の正式な歴史書にも記されている存在なのだ。

現実的なアレンと違って、父である先代は信心深く伝承や慣わしをひどく重んじていた。その父が絶大なる信頼を寄せていた予言者ブラウンを、父の死後、王宮から追い出さなかったのをこれほど後悔したことはない。

ここ数年、相談役として王宮で静かに暮らしていたブラウンが、突然『月の姫は既にこの世に生を受けている。近い将来、太陽王と巡り合うだろう』と予言したのだ。

「あのジジイ……ゆっくり余生を楽しめと言ったのに、ここにきて面倒なことをしてくれたものだ。おかげで『月の姫』を名乗る不屈き者が後を絶たなくなったではないか」
 予言者として前王の信頼が厚かったブラウンの言葉だけに、特に年配の家臣たちは喜びに沸き、こぞって『月の姫』探しを始めた。

おかげで『月の姫』を探す王家の動きは国内に漏れてしまい、月の姫を名乗る娘が何人も城を訪ねてくるようになってしまったのだ。

「まあまあ。そんな風に言いながらも、結局はブラウン様を城から追い出したりなさらないですもんね。陛下はお優しい方ですよ」

そう微笑みながら言われ、益々不機嫌そうにアレンは横を向いた。

家臣という立場であるが、クレイグは血の繋がったアレンの従兄だ。同じ乳母につき共に学び育ってきただけあって、気心は知れすぎるほど知れている。ゆえに、なんでも言いたい放題だ。

「大変ですねえ。王ともなると、結婚相手も自分で決められず……本当にいるかどうかわからない『月の姫』を探し出さなきゃいけないなんて」

アレンと違い幼い頃から恋多き男だったクレイグは、去年大恋愛の末に王都で働くパン屋の娘を妻に迎えた。仮にも王の従兄で第一の側近でもある人物が、と周りの大反対

を押し切った結婚だった。

二人は、一年経ってもなお冷める気配など全くない熱愛ぶりを見せている。それゆえ、今回、妻と離れての同行を命じたアレンをクレイグは笑顔でチクリチクリと攻撃してくるのだ。

「そう他人事のように言うがな。お前だって本来ならパン屋の娘など嫁に迎えている場合ではないのだぞ。俺に何かあれば、王位を継ぐのはお前しか……」

「あ、無理です。妻と結婚する時に、私は正式に王位継承権を放棄してますからね」
 アレンは馬車の天井を仰いだ。

「クレイグ……改めて言うが、俺に何かあったらこのサマルド国をどうするつもりだ」
 「やだなあ。だからそうならないために、こうやって、いるかどうかわからないお姫様探しに同行してるんじゃないですか」

クレイグはにっこりと不敵な笑みを浮かべながら言った。

「それに、今回は……もしかすると、もしかするかもしれませんがからね」

『月の姫は銀色の髪を持った娘』としか民の間には伝わっていない。そのせいで、とても銀髪とは言えない白髪の娘までもが月の姫だと名乗ってくる。いちいち大量の偽者を審議するために王が出向くことはありえないが、今回ばかりは違った。

「領主の娘と言ったか」

「ええ。ブラウン様が、月の姫がいると告げた東の方角であるのに加えて……その領主が治める地では、奇跡とも言える出来事が以前から多発しているようです。そのせいで、近隣の街からは『奇跡の街』と呼ばれているとか。年寄りどもが、今度こそはと色めき立つのも無理ありません」

正確に何年前からかはわからないが、近隣の街に比べて天候が安定して作物の豊作が続き、水害にも遭わなかったという。さらに、辺境の地では決して育つはずのない万能の薬草、白銀花まで花を咲かせているのだとか。

「ただ……この領主はちよつと、ずるがしこいところがあるんですがね。豊作が続き安定した収益を得ているはずなのに、国に納められている税金はずっと辺境制度で割り引かれた金額のままです。そのあたりの不公平さを、ついでに調査しないと」

「お前にとってはそれが第一目的か？ まあ俺としても、お前に任せるのが一番安心できるがな」

密かに守銭奴と呼ばれ金に細かいクレイグなら、抜かりなく調査してくれるだろう。

「俺は寝る。着いたら起こせ」

とりあえず辺境の地に赴く価値はあるようだが、面倒なものには変わらない。

それに、古い家臣たちの言いなりになっていくようで、面白くないという気持ちも少なからずあった。

若くして王位を継いだアレンに敵は多い。ようやく王政も落ち着いてきたとはいえ、王都を長く空けるのも気が進まない。

アレンは馬車の座席に深く背を預けると、固く目を閉じた。

半刻ほど経った頃だろうか。うつらうつらと眠りの浅瀬をさまよっていたアレンは、ハッと臉を開いた。

心臓がどくどくと早鐘を打ち始め、たまらず胸を押さえつける。

「どうしました？」

向かい側に座っていたクレイグが、突然身を起こしたアレンに驚いた様子で声をかける。

「……いや。到着は間もなくか？」

一度速まった鼓動はなかなか鎮まらず、アレンは胸を押さえたまま窓から外を見つめた。

「どうでしょう？ 変わり映えのない景色ですからねえ。御者にでも聞いてみましょ

うか」

クレイグがそう言つて窓の外へと身を乗り出す。すると馬車がゆつくりと減速を始め、馬で並走していた兵士がクレイグに何か声をかけてきた。兵士と言葉を交わしたクレイグが、アレンの方を向く。

「間もなく到着のようです。アレン様、よくわかりましたね」

「……何か、おかしい様子はないか？」

「は？　ここから見たところ、特におかしい様子は見受けられません……」

クレイグは窓から首を出しキョロキョロと周囲を窺うと、不思議そうに言った。

アレンは固く唇を引き結び、自分の状況を理解しようと努める。

誰かに名前を呼ばれたような気がして目が覚めた。焦燥に駆られるような、それでいて高揚してくるような、不思議な感覚がアレンの身を包んでいる。

クレイグや外を走る兵士の様子はいたつて普通で、どうやらこの何とも説明しがたい感覚に襲われているのは自分だけらしい。

（これは、どういうことだ？）

クレイグの前では散々文句を言ってきたものの、アレンとてサマルド国で育つた人間だ。

自分を呼ぶのは『月の姫』ではないかという考えが頭の片隅にちらつく。

黙り込んだままのアレンをまだ不機嫌なのかと勘違いしたか、クレイグは珍しく労わのような笑みを向けてきた。

「まあ、これだけ信憑性が高いと言われていて、姫が偽者だとわかれば……次にまた同じような話が出て、わざわざアレン様が出向く必要はなくなります。年寄り連中としてしばらくはおとなしくなるでしょう。どうか今回は、ご辛抱ください」

「……ああ」

どつちに転ぼうが、月の姫を探すために王都を離れるのは最初で最後になるかもしれない——

そんな予感を覚えながら、アレンは小さく頷いた。

* * * * *

（陛下をお迎えする宴が始まったみたいだわ……）

地下室の硬いベッドの上に座り込み、ライラは小さなため息をついた。

たとえ地下室にいても、屋敷の賑わいはある程度伝わってくるのだ。

ライラの前には、数刻前にザラが運んできてくれた食事が置かれている。今日の食事は、いつもに比べて品数も多く豪華なものだった。

だがライラはその食事に、ほとんど手をつけていない。なぜか気持ちが落ち込んでしまい、食欲が湧いてこなかった。

(きつともう、マーガレット様は陛下にお会いになったわよね……)

国王は、『月の姫』と言われているマーガレットに会いに来たのだから当然だ。

しかしマーガレットが悠然と微笑み肖像画の主の前に立つ姿を想像すると、どうしてだか胸がキリキリと痛む。

ライラは必死に、自分とは関係ない世界だと言いつ聞かせた。

それに、二人の面会が無事に終了し国王の一行が屋敷を去れば、自分は地下室から出ることができると。

きつとすぐにまた、何事もなく日々の雑務に追われるようになるだろう。早く全てが終わり、こんな胸の痛みなど忘れてしまいたい。

ライラはそれだけを考え硬いベッドに身体を横たえると、きつく眼を閉じた。

ところが、ライラの願いは数日経っても叶わなかった。翌日も翌々日も、地下室から

出られる気配がないのだ。

その日、いつもと同じように食事を運んでくれたザラの顔を見て、ライラは表情を曇らせた。

「ザラ？　なんだか疲れているみたいだけど……」

「大丈夫よ。ただ……普段の仕事に加えて毎晩宴の準備があるでしょう？　さすがに皆疲れてきているの」

「毎晩の宴って……」

「国王様はそんな必要ないって仰つてらしいけれど、屋敷に滞在されているんだから当然のことだってブルーノ様が毎晩宴を開かれるのよ」

顔色が悪く疲労を滲ませたザラを見ると、胸が痛む。

「私が少しでもザラを手伝えたらいいのに……」

ザラはライラを安心させるように微笑んで見せ、それから不思議そうに首を傾げた。

「でもねえ……お忙しい陛下が、どうしてこんなに長く屋敷に滞在し続けるのかわからないって皆で話しているのよ」

マーガレットに会い王都へ連れて行くだけなら、それほど日数は必要ないはずだ。

「もうマーガレット様にはお会いになったのでしょうか？」

「ええ、そりゃもちろん」

国王一行がこの屋敷に到着して、既に四日も経っている。あれだけ自慢げにしていたことを考えると、マーガレットも乗り気だったのは間違いない。

もしかしてマーガレットが王都に行くための準備に時間がかかっているのかも思っただが、ザラは首を振った。

「マーガレット様がお支度をなさるんだとしたら、誰か手伝わなければならぬでしょう？ 使用人の誰もそんなことを言いつけられていないのよ。マーガレット様の機嫌も悪くなる一方だね。困ったものだわ」

だとしたら、国王がこの屋敷にいつまでも滞在し続けているのはなぜだろうか。

「もしかしたら、陛下には真実がわかっていらっしやるのかもしれないわね……」

ザラにしては珍しく含みのある言い方に、ライラは首を傾げた。

「どちらにしろ、早くここからライラを出してあげたいわ。こんな地下にいたら、お月様の光も届かないもの」

ザラは優しくそう言っ、ライラの黒い髪を優しく撫でる。

「陛下が……ライラのことを見つけてくださったらしいのに」
ぽつりと眩めまかれ、ライラはきょとんとザラを見上げた。

「どういう意味？」

「いいえ、なんでもないわ。そんなこと、ここで働かせてもらっている身で言えないものね」

ザラの言葉を不思議に思いながらも、ライラは気になっていたことを問いかけてみた。

「……ねえ、ザラは陛下をお見かけした？」

「宴うたげの際に、遠目でちらりとお見かけしましたよ」

「どんな方だった？」

「なんだか不機嫌そうに顔をしかめてらっしやっつてねえ……ちよつとよくわからなかつたわ」

「そうなの？」

でも、遠目でもかまわないから、一目あの肖像画の君を見られたらどんなにいいだろう。別世界の人だとわかっていても、いや、わかっているからこそ——一度だけ、あの人を見てみたい。そんな思いに囚われほんやりとしていると、ザラが何かに気づいたようにライラを見つめた。

「ライラ、少しだけ外の空気を吸いに行つてはどう？」

「え、でも……」

「すぐに戻れば大丈夫よ。ブルーノ様やマーガレット様は御一行の接待で忙しいし、こんな時にわざわざ地下へ来る人はいないでしょう？」

確かに、ずっと地下の湿った空気が吸っていて気が滅入っていた。ザラの言う通り、ほんの少しなら大丈夫かもしれない。

「うん、ありがとうザラ。後で、一人でこっそり出てみる」

ザラはライラの華奢な肩を数回撫でると、ゆっくり立ち上がる。

「それじゃあ、外に出る時は充分に気を付けるんですよ。夜になったらまた様子を見るから」

「うん、ありがとう」

コツコツと規則正しい靴音を立てながらザラが行ってしまつと、再び地下には静寂が訪れた。

(少しくらい……大丈夫よね)

もしかしたら、遠くから宴の様子を垣間見るくらいならできるかもしれない。

そう思うとほんの少し気持ちが晴れる。ライラはザラが運んでくれた食事を膝に載せ、スプーンを手に取った。

* * * * *

「何かわかったか？」

屋敷の大広間で盛大な宴が開かれている中、アレンは影武者にその役割を任せ、自ら民と変わりない服に身を包み街へ向かっていた。

アレンと同じような格好をしたクレイグが、隣で深いため息をつく。

「信頼できる部下にも手伝わせて調べていますが……今のところ該当する娘が見つかったという報告はありません。銀髪どころか、金髪の娘すらほとんどいないそうです」

アレンに比べて比較的自由の利くクレイグは、この数日こっそりと屋敷を抜け出し街で年頃の娘がいる家を探っていた。

「ついでに街の者に話を聞いて回ったのですが、この街で奇跡と言われていることが起こり始めたのは、確かにあのマーガレットとかいう娘が生まれてからだそうです。万能の薬草と言われている白銀花も、昔は全く見かけなかったとか」

「全て、あの娘が生まれてからと街の者は信じているということだな」

「ええ。そうです」

アレンは黄金の髪をフードですっぽりと覆い隠したまま、盛大に顔をしかめた。

「王家もバカにされたものだな。あの父娘、わかってやっているとしか思えん……」
 一般の民は『月の姫は銀色の髪をしている』程度の認識しかないので、銀色の髪を持って生まれただけで上を下への大騒ぎになる。『うちの娘は月の姫だ』と思ひ込んで王都へ連れて来る親が後を絶たない。親心を思えばそう勘違いしても仕方ないし、こちらも丁重に断る。

だが、この地の領主であるブルーノと娘のマーガレットは明らかに違う。

「この街に月の姫がいるのは間違いない。あの二人はそれを知っているながら、月の姫を騙っているのだ」

確かに髪の毛は艶やかな銀色をしていたが、あの鈍い光は人工的に染め上げられたものだ。偽者を幾人も見てきた者なら、すぐにわかるだろう。

クレイグは不思議そうにアレンを見つめた。

「確かにこの街には神の恩恵とでもいうのか、月の姫がいるかもしれないと思わせる事実がたくさんあります。けれど……そこまではつきりと存在を断言できるものですか？」

この街に入るまでは月の姫を探す気など全くなく、早く面倒なことを終わらせたいという態度を隠しもしなかったアレンだ。それが今は誰よりも積極的に月の姫探しに力を入れ、自ら滞在を引き延ばしている。

クレイグに怪訝そうに見上げられ、アレンはふっと笑った。

「疑っているのか」

「そういうわけではありませんが……ただ、一体どういう心境の変化なのかと。領主の娘が偽者だというのは、私でもわかりましたがね」

クレイグの疑問は、もつともだ。アレン自身も正直、この感覚をどう説明したらいいのかわからない。

馬車でこの街に近づくにつれ、不思議な感覚が身体を包んだ。それを感じているの自分だけだとわかった瞬間、頭を掠めたのは月の姫の存在だった。案内されずとも月の姫がいるという屋敷の場所が特定できた時、これはいよいよ本物かと緊張を高まらせたが、現れたマーガレットは一目でわかるような偽者だった。

アレンに媚びるような視線を向けながらも堂々と振る舞う娘の態度とは裏腹に、どこか緊張を滲ませている領主の態度。

直感で本物の月の姫を隠しているのだと悟った途端、こみ上げてきたのは怒りだった。この父娘が月の姫を騙っている以上、本物は身を隠しているしかない。

（——ならば、俺が見つけてやる）

そう決意すると、燃えるような高揚感がアレンを包んだ。

「お前でも偽者とすぐわかるやつらを、のさばらせておくわけにはいかないだろう？」
 「はあ、王としての正義感ってやつですか。確かに、この状況であの娘を月の姫じゃないって言ったって、街の者たちは信じないでしょうしね」

クレイグは納得がいった様子でうんうんと頷いている。
 「髪を銀色に染める染料はとてつもなく高価ですし、常に街の者たちを騙し続けるだけの量を手に入れるには、かなりの資産が必要です。あの男、国で管理すべき白銀花を無許可で販売しているのかもしれないねえ。税金も払わずに」

こちらはそう苦労もなく証拠を掴めそうだと、クレイグがほくほくした顔で言った。
 それを横目で見ながら、アレンは深く息を吐く。

月の姫は一体どこにいるんだ。

身体に流れる血がこの地に必ずいると告げているのに、そこから先の行方が知れない。自分が太陽王である資質を試されているようにすら思えてくる。

「お前は……本当に何も感じないのか？」

目を追うごとにこの街に立ち込めている不思議な気配は強くなっていく。

しかし、クレイグは静かに首を横に振った。

「俺には何も感じられません。アレン様が何かを感じ取っているのだとしたら、それは

やはり、あなたが真のサマルド国王だからじゃないですかね？」

そして、クレイグは小走りでアレンの横に並ぶ。

「アレン様がこの街に月の姫がいるというのなら、俺も信じます」

まっすぐ前を見据えたまま、アレンは強い瞳で言った。

「あの領主の娘を月の姫ではないと拒絶してこの街を去るのは簡単だ。けれど……それでは、本当の月の姫を得る機会をみすみす逃してしまふ。あの二人は間違いない、本当の月の姫を隠している。だが問い質したところで口を割るとも思えん。だったら」

「どうにかして……こちらで姫を見つけるしかないってことですな」

アレンが無言で頷くと、クレイグもまた真剣な眼差しでアレンを見上げた。

「王都を空けたままにしておくのも、限界がある。今夜見つけられなければ、ここを去らねばならない」

今夜は雲一つない満月だ。既に高く上がった白銀の月を見上げながら、アレンは力強く言った。

「必ず、月の姫を見つけてやる」

改めてフードを深くかぶり直して金髪を隠すと、アレンはクレイグと共に街の中心部へ向かって歩き出した。

* * * * *

誰かに呼ばれているような気がして、ライラはうっすらと目を開けた。

いつの間にかウトウトと眠っていたようだ。眠っている間にザラが来てくれたのか、ライラの身体には毛布がかけられ、空の食器も片づけられていた。

おそろく真夜中なのだろう。屋敷はすっかり静寂に包まれている。

きっともう国王も眠ってしまったている。せめて一目でも見てみたいと思っただけに、ライラはがっかりしながら身体を起こした。

変に目が冴えていて、このまま横になってもきっと眠れない。

それならやっぱり少し外に出て気分転換をしてこよう。

ライラは静かにベッドから降りると、そっと地下室を抜け出した。

音を立てないように階段を上る。誰かに鉢合わせたらどう言い訳をしようとドキドキしたが、辺りは静まりかえり人の気配は全くなかった。

重い扉を押して外に出ると、目の前には見事な丸い月が浮かんでいる。

(今夜は、満月だったのね)

さくさくと草を踏みしめながら裏庭を抜ける。月光浴とでもいうのだろうか。こうして月の光を浴びることは、ライラにとつて何よりも心地いい時間だった。

(お月様が見守っていてくださるから……少しくらい外にいても大丈夫ね)

地下室に入ってから、ザラが運んでくれた水で簡単に身体を拭くことしかできなかった。汗をかくようなことをしてはいえないといえ、やはり身体の汚れは気になる。

ライラは少し足を伸ばして屋敷の裏を流れる川で身を清めようと思いついた。

屋敷の裏手へ回ると、静かな川面にキラキラと月の光が反射しているのが見えた。まるで、川全体が輝いているようだ。

いつも見慣れているはずの景色だが、今日はなんだか一段と美しく見える。

ライラは、ほうっとため息をつきゆつくりと川の傍まで歩み寄った。

身体を拭きただけのつもりだったが、足を水の中に入れてみるととても気持ちがいい。まるで沈んでいた気持ちが、澄みきっていくように感じた。周りに人の気配が全くないこともあり、ライラは思い切つて全ての衣服を脱ぐと静かに水の中へと身を沈めた。

川の水は冷たかったが、サラサラと流れる水に身をまかせると、とぶんと頭まで水に浸かつて目を開くと、澄んだ水の中にまで月の光が差し込んでいた。ゆつくりと顔を出す。水面の月は揺らめいて乱れたが、またすぐに美しい姿を映し出す。白銀の丸い月を開

じ込めるように、ライラは手を伸ばし川の水をすくった。

「綺麗……」

ライラの手の中に、月がある。ゆらゆらと揺れ動く月を見ると、なぜだか切ない気持ちになった。

『本当の月の姫が、ライラだったら……』

かつて一度だけ、ザラがそう口にしたことがあった。ブルーノに仕える身でありながら、そんな発言をしては命に関わる。

二人だけの時とはいえ不用意な発言に驚いて目を見張ると、ザラは悲しげな笑みを浮かべてライラの頭を撫でた。

その後、ザラがそう口にすることは二度となかったが、たった一度だけのその言葉は、ライラの胸の奥深くにずっと残っていた。

自分のようにこんなバサバサのみっともない髪をした娘が、月の姫であるわけがない。そんなことはわかっている。

ゆらゆらと水の中で揺れる髪を、ほんやりと手に取った。まっ黒なこの髪色は、実はライラ本来のものではない。

ライラの髪は、微かに銀色を帯びた白髪だった。使用人の分際でマーガレットに近し

い髪色をしているなどおこがましいと言われ、髪が伸び少しでも地毛が見えると、慌て髪を黒く染める日々だ。

物心がつく前よりずっと染料で髪を染めてきたので、髪はひどく傷んでバサバサになっている。まるで老婆のようだと言われ、ライラは自嘲気味に思った。

（もし……私が月の姫だったら、陛下にお会いすることができたのかしら……）

ほんやりとそう考えてから、はっとして頭を振った。そんなことあるわけがない。

身寄りのないライラは、拾ってくれたブルーノのもとを出ていくことなどできないのだ。

そう思った瞬間、すっと身体の芯が冷えていく気がして、ライラは水の中でふりりと身を震わせた。一生あの屋敷でブルーノの顔を窺う生活に絶望しかけたが、あそこには母親のように寄り添いライラを支えてくれるザラがいる。

屋敷を追い出されてしまうとライラは独りぼっちになってしまいが、あそこにいる限りはザラが傍にいてくれるのだ。

ライラは空に浮かぶ満月を見上げ、最後にもう一度頭まで水の中に浸かった。

いつまでも外にいては、万が一誰かに見つかった時にザラにまで迷惑をかけてしまう。

もうそろそろ地下室に戻ろうと水面から顔を出し立ち上がった時、背後でがざりと繁^{しげ}みが揺れる音がした。

「っ!？」

考え事をしていたせいで、人の気配に気づかなかった。

ライラは慌^{あわ}てて再び川の中に身を沈める。後ろを振り返ると、フードを深くかぶった見かけぬ人が立っていた。顔はよく見えないが、その体格から男性であるのは間違いない。ライラの顔が、さつと青ざめる。

この場から逃げたくても、自分は裸だ。着替へは男が立つ繁みに置いてあって、取りに行くこともできない。

ライラは震えながら男性にくると背を向け、顎^{あご}まで水の中に浸^ひかった。

うかつだった。今まで何度か男性に襲^{おそ}われた恐怖^{おそ}が蘇^{よみがえ}る。

どうしたらいいのかとパニックを起こしかけていると、男が口を開いた。

「怖^{おそ}がなくていい。……こんなところで何をしているのだ？」

穏やかな口調に、少しだけライラの気持ち^{こころ}が落ち着く。どうやらこの男は、今までライラに触れようとしてきた男たちとは違うようだ。

「み……水浴びをしておりました」

「こんな時間にか？」

地下室に閉じ込められている状態では夜にしか出て来られない。けれどもそれを男に伝えるわけにはいかず、ライラは背を向けたままこくりと頷いた。

「お前は、この街に住む娘か」

「は、はい」

「この数日街を見て回ったが、お前を見かけることはなかったように思う」

どうしてそんなこと聞くのだろう。ちらりと肩越しに振り返ってみると、男は上質^{じやうしつ}そうなマントに身を包んでいるのがわかった。

もしかしたら、国王の家臣かもしれない。

『いいか！ 俺がいいと言うまで、絶対にそこから出てくるなよ！ お前のような気味の悪い娘を陛下のお目にかけるわけにはいかないからな!』

ふいにブルーノから言われた言葉が頭に浮かび、ライラはすくみ上がった。絶対に出てくるなど言われた言いつけを破ったどころか、お客様^{おきゃくさま}の目に触れてしまった――。これがブルーノに知られたら、何をされるかわからない。

「あ、あの……お願ひです。どうか、何も言わずにここから立ち去っていただけませんか」

ライラは震えながら口を開いた。男の目的はわからないが、彼はたぶん偶然通りかかっただけだろう。優しい口調と高貴そうな雰囲気から、頼めばきっとライラの願いをきいてくれるような気がした。

「どうしてだ？ ……もつとお前と、話をするわけにはいかないか」

思いがけない言葉を返され、ライラは凍り付いた。それと同時に、低くて魅惑的な声に胸がぞくりと震える。

「わ、私は……あなた様の前に出られるような身分の者ではないのです。どうかどうか、見なかったことにしてくださいませ……」

絞り出すように紡いだ言葉はか細く、闇夜に消えていく。できれば何も言わずに立ち去ってほしいのに、男の足はびくりともその場から動かない。

「お前は、何をそんなに怯えているのだ？」

ライラは一刻も早く男が立ち去ってくれることを願い、無言でふるふるとう首を振る。すると、男が再び口を開いた。

「わかった。とにかく……そんなに冷たい川の水に浸かっているのは身体に障る。早く、川から上がれ」

初対面の男性に、身体を勞いたられた経験などない。恐怖とは全く違う胸の鼓動に、ライ

ラはどうしていいかわからなくなった。

「あの……上がりたくても、私の服はあなた様の足元に置いてあるのです」

正直にそう言うと、男がキョロキョロと辺りを見渡している気配がした。

「わかった、それならしばらく後ろを向いていよう」

「え……」

そのまま立ち去ってくれたらいいのに、どうやら男にその気はないらしい。

恐る恐る振り返ってみると、確かに男はライラに背を向けて腕組みをして立っている。ライラはしばし迷ったが、さっさと着替えを済ませてしまおうと決めてザバリと川から上がった。手早く脱ぎ捨てた衣服に駆け寄り、男が後ろを向いていることを確認しながら急いで衣服に袖を通す。

男は近くで見るとかなりの長身だった。肩幅も広く、鍛え上げられているのが一目でわかるほど逞たくましい身体つきをしている。それに、後ろ姿からも高貴な雰囲気が出てくるようだ。

傍にいと、なぜか振り返り自分を見つめてほしいと願ってしまう。男性にこんな感情を抱くのは初めてで、ライラはいつの間にか着替えの手を止め、ぼうっと男の後ろ姿を見つめていた。

(いけない、早く着替えなくては……)

そう思って簡素な使用人服の前ボタンを留めようとしたのと、男が振り返ったのは同時だった。

「えっ……!!」

一瞬、何が起こったのかわからなかった。

ゆっくりとこちらを振り返った男は、呆然とした様子でライラを見つめている。フードから覗く深い緑色の瞳と目が合った瞬間、吸い寄せられるようにお互いが動けなくなった。数秒後、我に返ったのはライラが先だった。

「……っ!」

泣きたくなるくらいの羞恥を覚え、使用人服の前を手で押さえて走り出そうとした。

「待てっ!」

男の横を走り抜けようとしたライラの細い腕を、男の手が力強く掴む。

彼の指がライラに触れた瞬間、身体にびりつと痺れるような感覚が走った。

(な、なに……?)

雷に打たれたような感覚に、思わず足を止める。その隙に男はライラをぐいっと引き寄せ、気づけば力強く抱きしめられていた。

肌に触れる温かい体温に、ライラはようやく自分の置かれた状況を理解した。

「はっ、離して……っ!」

必死に男の身体を押し返そうとするが、どんなに押ししてもびくともしない。それどころか、益々力を入れてライラの身体を抱きしめてくる。

(どうして、こんな……!?)

パニックに陥りながらも、ライラは必死に頭を働かせ力一杯抵抗した。

今まで、悪意を持った男性に触れられそうになったことは何度もある。だがその度に不思議な力が働いて守られてきた。こんな風に直接男性に触れたのは、初めての経験だった。

なぜ自分は抱きしめられているのか。思いがけない事態に動転して、ライラの呼吸が荒くなる。それに気づいたのか、男の腕の力がほんの少しだけ緩んだ。

「落ち着け!」

低い声に触れた身体から直接響いてきて、ライラの呼吸が段々と落ち着いていく。初めて会ったはずなのに、どこか懐かしいような不思議な感覚がする。

どうして、この人の声はこんなに身体に沁みていくのだろう。

ライラが身体の動きを止めると、男は子供をあやすように彼女の背中をトントンと叩

いた。

温かい身体に包まれ、気持ち静まっていく。

この人は、一体誰だろう。

ライラは抱きしめられている状況も忘れ、顔を上げて男の顔を正面から見つめた。

フードに隠れてよく見えなかった顔も、この距離ならばっきりとわかる。

「あ……………」

驚きで、それ以上の言葉が続かなかった。

その男の顔は、マーガレットの部屋で見かけた肖像画にそっくりだったのだ。

口を開き凝視するライラに、男がふっと目を細めた。

「その顔は……俺が誰だかわかったか」

そう言って男は、かぶっていたフードをゆつくりと外した。月明かりに、輝くばかりの見事な金髪が現れる。

「サ、サマルド国王、アレン様っ!!」

あまりのことに再びパニックを起こしかけたライラの顎を掴み上を向かせると、アレンは静かに顔を近づけてきた。

目を見開いたライラのすぐ近くに、アレンの顔が迫る。何かを確認するようにじつ

りとライラを見つめるアレンの表情が、緩やかに変化していった。

頬を掴まれ視線が逸らせないライラには、その変化がはつきりと見てとれた。

ザラが自分を見つめる時と同じようにも、全く違うようにも思える眼差し。親愛よりもっと深いものが込められた視線に、頬が自然と赤味を帯びてくる。

「あ、あの……………」

とくとくと心臓の音が速くなる。耐え切れずに口を開けば、アレンは困ったように微笑んだ。

「初対面の女性にこんなことをすべきではないとわかっているのだが……離せないな、美しい娘よ」

遠目でも綺麗だと思ったアレンの緑の瞳は、近くで見るとさらに宝石のようにきらめいていた。ほんやりとその瞳を見つめていると、アレンが目を細めた。

「綺麗な瞳だな。月の光が反射して……まるでサファイアのようにだ。吸い込まれそうで、目が離せない」

自分のことを褒められているとわかり、さらに顔が熱くなる。アレンの腕の中で心地よさを覚えながらも、間近で見つめられているのが恥ずかしくてライラは思わず身じろぎをした。

立ち読みサンプルはここまで

アレンは逃がすまいと片腕に力を入れ、ライラの顎を掴んでいた指を頬へと移動させる。そして大きな手の平でふわりと頬を包んだかと思うと、ゆっくりと唇を近づけてきた。

初めて出会った人と、こんなことをしていいはずがない。

頭でそう理解していても、ライラの身体は全く動かなかった。

吸い寄せられるように唇が近づき、自然と瞼を閉じる。アレンの唇が軽く触れた途端、ライラの身体がぶわりと沸騰したみたいに熱くなった。

身体から何かが剥がれ落ちていく。そんな感覚があったが、それが何かわからない。

ただ、柔らかく熱い唇の感触に全身が蕩けそうだった。

一度離れた唇が再びゆっくり触れてきて、全身がどくんと鼓動する。

アレンは、瞼を開いてじっとライラを見つめてきた。

鮮やかな緑の瞳に、蕩けたような表情の自分が映っている。

そこに映るライラの髪は見慣れた黒色ではなかったが、初めての経験に戸惑う彼女に気づく余裕はなかった。

アレンは一瞬驚いた顔をしたが、すぐにそれは納得の表情へと変わっていく。その顔は、揺るぎない自信に満ちていた。

「……見つけたぞ、やっと」

